

## 芥川龍之介の「蜜柑」と魯迅の「一件小事」

成瀬哲生

### 一

ここ数年、徳島大学教養部の文学の講義において、芥川龍之介の作品を介して中国の古典文学に及ぶという試みをし、それなりの発見もしくは探求の体験を味わった。その一端は、「芥川龍之介の〈杜子春〉——鉄冠子七絶考——」（徳島大学国語国文学「第2号」）や「〈奉教人の死〉と〈菩薩蜜〉——芥川龍之介と中国小説の影——」（未発表）としてまとめてきた。たまたま文学の講義とは別に人文科学総合Aの講義も担当しており、こちらの方は、中国の文学に現れた人間像というテーマの下で魯迅の作品を扱ってきた。中国の近代文学については、魯迅だろうが何だろうが筆者の蓄積は貧弱であり、教うるは学ぶの半ばどころか全てとすを地でいき、専家（主に丸尾常喜氏）の研究に拠って講義を準備した。この二人の作家を平行して取り上げたのは、平行して取り上げることに何か意味があると予想したからではなく、聴講する学生に馴染みの作家から中国の古典

文学を講義し、二つの講義内容が筆者の頭の中でこんがらがらないようにするために時代を変え、中国の近代文学からやはり学生に馴染みの作家を取り上げた結果に過ぎない。さらにその結果、筆者の日常生活に芥川龍之介と魯迅が割り込み、読後感が鮮明なうちに、両者の作品を行き来する機会も増えたのである。芥川龍之介の「蜜柑」と魯迅の「一件小事」との間に有機的な何らかの関係があると直感したのは、そのような事情があつてのことである。直感であつて、直観ではない。直感は直感に過ぎず、正しいとは限らない。全くのへぼ筋かも知れないのだが、ちよつぱりワクワクした一瞬ではあつた。「蜜柑」も「一件小事」もよく知られた作品である。或は既にこの二つの作品を比較して論じることがなされているのかも知れない。芥川龍之介の「蜜柑」は、新潮文庫その他、手近の作品集に収められていることが多く、魯迅の「一件小事」は、各種の翻訳もあり、また中国語の教科書で接することも多い。ちなみに筆者の学生時代の中国語テキストの一つが『魯迅作品集』（大安

で、二番目の作品が「一件小事」であつた。どちらの作品もかつて一度ならず読んだことがあるにもかかわらず、二つの作品が結び付くことはなかつた。人間の常として忘れっぽいのである。しかし、二つの作品の普及度から考えて、既にその類縁性への言及があつたとしても不思議ではない。その場合、礼無くして、屋上屋を架す厚顔無恥となりかねないが、ことの顛末を御了解の上、御海容を賜りたい。

## 二

芥川龍之介の「蜜柑」は、「或曇つた冬の日暮である。私は横須賀発上り二等客車の隅に腰を下して、ぼんやり発車の笛を待つていた。」という書き出しで始まる。作者とらしい私は、云いようのない疲労と倦怠とで外套のポケットの中の夕刊を出して見ようという元氣さえない。発車の笛が鳴ってから、改札口の方からけたたましい下駄の音が聞こえ出し、十三、四の小娘が慌ただしく中に入つて来る。三等の切符を握りしめて前の席に腰を下ろした小娘は、いかにも田舎者じみていて、下品な顔立ちと不潔な服装が私を不快にした。卑俗な現実を人間にしたような小娘の存在を忘れたくて、ひろげた夕刊の紙面に眼を通す。講和問題、新婦新郎、瀆職事件、死亡広告——夕刊を埋める平凡な記事は、退屈な人生の象徴であつた。私は、一切がくだらなくなつて、うつらうつらし始める。ふと何かに脅されたような心もちがして、あたりを見まわすと、例の小娘が思うようには動かない窓を頻に開けようとしている。両側の山腹

が間近く迫つており、汽車はトンネルに入ろうとしていた。私は、腹の底に険しい感情を蓄えながら、冷酷な眼で眺めた。汽車がトンネルに入ると同時に、窓がぱたりと下へ落ち、煙が濛々と車内に張り出し、私はそれを満面に浴びて息もつけない程咳きこむ。が、小娘は私に頓着する気色もなく、窓の外へ首をのばし、じつと汽車の進む方向を見やっている。咳きこみつつ、頭ごなしに叱りつきたい気持ちに駆られている内に、汽車はトンネルを出、或貧しい町はずれの踏切にさしかかった。踏切の柵の向うには、曇天に押しすくめられたかと思う程、揃つて背の低い、頬の赤い三人の男の子が並んでいた。通る汽車を仰ぎ見ながら、一斉に手を挙げ、意味不明の喊声を一生懸命に迸らせた。その瞬間、窓から半身を乗り出していた娘は、手をつとのばして勢よく左右に振つた。五つ六つの蜜柑が子供たちの上にばらばらと降りかかる。私は思わず息を呑み、刹那に一切を了解する。恐らくはこれから奉公先に赴こうとしている小娘は、わざわざ踏切まで見送りに来た弟たちの労に報いるために、懐の幾顆の蜜柑を窓から投げたのである。汽車は、瞬く間もなく通りすぎた。私の心の上には、切ないほどの光景が焼き付けられ、或得体の知れない朗な心もちが湧き上がつて来た。私は、別人でも見るように小娘を注視した。

これが芥川龍之介の「蜜柑」の梗概である。もともと小品といつてよいような、短い作品の梗概にしては長くなつてしまつたが、作者と思しい私の心の動きこそが魯迅の「一件小事」と比較する上で不可欠と思われるからである。芥川龍之介の「蜜

柑」の終結部分もまた比較する上で不可欠と思われるので、そのまま引用する。

私はこの時始めて、云いようのない疲労と倦怠とを、そして又不可解な、下等な、退屈な人生を僅に忘れる事が出来たのである。

「蜜柑」は、発表当時から評判のよい作品である。佐藤泰正編「芥川文学作品論事典」(三好行雄編「別冊国文学第二号 芥川龍之介必携」所収)の「蜜柑」の項には好意的な評価が紹介されている。いささかも表現に無駄のない、作者の人間的な心持の温く染み出た作品(南部修太郎「五月号創作の印象 五」)は、大正八年(一九一九)五月七日の「読売新聞」での評価である。この評価は、現在にもつながっている。「蜜柑」は小説というより小品、芥川らしい気持ちの動きのよく出ている作品(井上靖「知的な虚構の世界」)は、昭和六十年十二月刊の『少年少女日本文学館 第六巻 芥川龍之介 トロッコ・鼻』の巻末に見える評価である。吉田精一「本文および作品鑑賞」(『近代文学鑑賞講座 第十一巻 芥川龍之介』)によれば、「蜜柑」は、芥川龍之介自身の直接体験が題材になっているらしい。「その原題が示すように、竜之介自身の直接体験を題材としたものであるう。菊地寛の『文芸作品の内容的価値』という論文の中に次のような一節がある。——芥川氏の『蜜柑』といふ小品がある。私は、あの題材を芥川氏から、口頭で聴いたとき、既にある感動に打たれた。——これによると、竜之介はこの事実に遭遇した時、菊地寛にもすぐにこれを伝えたのではないかという

想像がなされ、彼が事実面に直面して受けた感動の深さが推しはかられるわけだ。」とある。ただし、否定的な評価もないではない。「独り角力の滑稽」「感傷の筆」「嘘の感動」という、進藤純孝氏の見解(『芥川龍之介』河出書房)があることを、平岡敏夫氏が「日暮れからはじまる物語——芥川試論・『蜜柑』と『杜子春』その他——」(『香川大國文研究』第一号)で言及している。進藤氏の見解も頭から無視し得ないものがあるようにも思われる。次節では、魯迅の「一件小事」を紹介し、さらに芥川龍之介の「蜜柑」との比較に及びたい。

### 三

魯迅の「一件小事」は、日本では一般に「小さな出来事」と訳されているようだ(以下引用は学習研究社『魯迅全集第二巻』の丸山昇氏の訳による)。芥川龍之介の「蜜柑」より更に短い作品であるが、三つの部分に分けることができる。前書きにあたる記述から始まり、その記述を受けて小さな出来事が書き出される。そして後書きにあたる記述で終る。前書きにあたる部分と後書きにあたる部分は、後でまとめて言及するとして、小さな出来事それ自体は、次のように書き出されている。

それは、民国六年(一九一七)の冬のことで、強い北風が吹き荒れていた。私は生計の必要から、朝早く出かけねばならなかった。道にはほとんど人影もなく、やっと人力車を一台拾って、S門へ向かわせた。

「蜜柑」は冬の日暮に汽車に乗っての体験、「一件小事」は

冬の早朝に人力車に乗っての体験。対照的といえど対照的であるが、その対照性は対称性とも置き換え可能な対照性であると思われる。作者とらしい私が乗った人力車は、白い大通りを進む。S 門に近づいて、車夫も足をゆるめていた、その時、思わぬ事故が発生する。突然、ほろずくめの老婆が車の前を横切り、風にあおられたチョッキが梶棒にひっかかつてしまい、ゆつくりと地面に倒れたのである。車夫は、お節介にも足をとめて老婆をたすけ起こす。老婆が車夫に怪我をしたといっているのが私の耳にも入る。老婆が怪我をするはずもない程ゆつくりと倒れるのをこの眼で見た私は、つまらぬ事にかわりあいになろうとする車夫の行動にイライラする。だが車夫は怪我をしたと聞くと、ためらいもせず、老婆の腕をとり、近くの派出所の正面に向かって歩き出す。私は、この時、異様な感覚にうたれる。

車夫の、全身はこりまみれの後ろ姿が、にわかに大きくなり、しかも、歩くにつれて大きくなって、仰ぎ見なければならぬほどになったような気がした。

一種の威圧に変じた車夫は、私の内部の「小ささ」をしばらく出す。私は、じつとすわったままであった。巡査がやってきて車夫が引けなくなったことを告げる。私は、深い考えもなく、巡査に銅貨をひとつかみ渡し、車夫にやってくれといい、まだひとつかみしている路上を歩き出す。

私は歩きながら考えていた。私自身のことに考えが及ぶのを避けたい気持ちだった。その前のことはともかく、あのひとつかみの銅貨はなんのつもりなのだ？ 車夫への褒美

か？ この私に車夫を裁くことができるのか？ 私は自身自身の問いに答えることができなかった。

小さな出来事それ自体の記述は、ここで終わる。作者と思しい私の心の動きが印象深い。芥川龍之介の「蜜柑」に通底する質のものがそこに感じられないであろうか。先に述べたように、魯迅の「一件小事」には小さな出来事それ自体の記述を挟み、前書きと後書きにあたる部分がある。これは、「蜜柑」が当該の出来事のみを記述しているのと異なる構成である。もし二つの作品に何らかの有機的な関係があるとすれば、それなりの解釈が不可欠であろう。先ず前書きにあたる部分から引用する。

私が田舎をあとに北京に出て来て、またたくまに、もう六年になった。その間、耳にし目にした国家の大事なるものも、数えてみれば少なくない。しかし、それらは私の心にはなんの痕跡も留めていない。それらの事件の影響を求めるとすれば、私の悪い性癖を助長したことだけである。

——正直な話、私は日ましに人をさげすむようになったのである。しかし、ある小さな出来事が、私にとっては意味のあるものだった。私を悪い性癖から引き離してくれる、いまでも忘れ得ぬ記憶として残っている。

日ましに人をさげすむようになった「一件小事」の私と国家の大事なるものとの関係のありようと、講和問題、新婦新郎、瀆職事件、死亡広告といった夕刊を埋める記事の一切をくだらなく思う「蜜柑」の私と世間との関係のありようとの間には、微妙な重なりがある。そして、ズレがある。後書きにあたる部

分は、次のようである。

この出来事は、今になっても、まだよく思い出す。私はこのために、いつも苦痛をこらえ、つとめて自分自身のことを考えようとするにもなる。ここ数年來の政治上、軍事上のあれこれも、私にとつては少年時代に読んだ「子曰く詩に云う」同様、一言半句も頭に浮かばなくなっている。ただ、この小さな出来事だけは、いつも私の眼前に浮かび、ときには、むしろ鮮やかさを増して、私を恥じさせ、心を新たにさせ、そして、さらに私の勇氣と希望を増してくれるのである。

この後書きにあたる部分が前書きにあたる部分に呼応していることは、明かである。そして、この後書きにあたる部分における意味づけは、「蜜柑」の終結部分の「私はこの時始めて、云いようなない疲労と倦怠とを、そうして又不可解な、下等な、退屈な人生を僅かに忘れることが出来たのである。」と、やはり微妙に重なりつつ、しかし、紛れもないズレがある。「蜜柑」の私が退屈な人生を僅かに忘れることができたのに対して、「一件小事」の私は勇氣と希望を増す。一九一九年五月四日に始まった五四運動の高まりに留意するにせよ、このズレは、芥川龍之介が引き受けた運命と魯迅が引き受けた運命との違いであつて、価値的に上下しなければならぬ問題とは思わないが、粗雑な言い方を取てすれば、東アジアにおける近代の精神が引き受けざるを得なかったものの位相を、それぞれに象徴しているように、興味深い。

魯迅の「一件小事」については、「読者に不可解な抽象的觀念が先行しているため具体的な世界を構成せず、失敗に終わっている。」（竹内好『魯迅』）という評価もあるが、その竹内好氏自身が「身近に取材した小品ながら、肯定面を取り出したところが他の作品に見られぬ異色である。」（『魯迅選集 第一巻』岩波書店）とも述べている。また「社会環境と魯迅の創作態度が、少しの矛盾もなく調和され、一介の車夫風情からも暖かいヒューマニティが見い出されることを強調し、封建勢力及一部知識分子に切実な反省を求めつつ同時にそれらの人々が辿らねばならない苦しい反省の精神的変遷過程を、リアルな手法で描写している。字数は近々千字内外であるが、小粒でもピリットした人の胸に逼るものがあり、不朽の名作たるを失わない。」（大山正春「魯迅・一件小事」に就いて、「明治学院論叢」第四十五号）との評価もある。魯迅の各種の選集に入ることの多い作品であるから、芥川龍之介の「蜜柑」と同様、一般的には評判の悪い作品ではない。なお芥川龍之介の「蜜柑」には菊地寛の証言があった。菊地寛は、芥川龍之介から体験話として聞かされている。面白いことに、魯迅の「一件小事」にも証言がある。弟の周作人の証言である。しかも、不思議な暗合であるが、その証言内容が菊地寛の証言内容と反対とまではいわないまでも、対照的なのである。

拠説那是在民国六年冬天、所謂S門当然是北京的宣武門、這介在会館與教育部的中間、馬路開闊、向北走去是相當的冷的。這一件事可能是実有的、不過我不曾聽他說過、在写

了出来之前、雖然我是在那年的春天来到北京的。(この出来事は民国六年の冬だそうだが、S門というのは北京の宣武門のこと、ここは紹興会馆と教育部の中間地点で、大通りがあり、北に向かつて行くときはかなり寒い。実際にあった出来事かも知れないが、私は彼から聞いたことがなく、この作品が書かれる前、その民国六年の春には私は北京に来ていたのだけども。)〔魯迅小説裏的人物〕上海出版公司)

「魯迅年譜」〔魯迅選集 第十三卷〕岩波書店によれば、魯迅は、当時、宣武門外の紹興会馆に住み、教育部に勤務していた。弟の周作人が郷里の紹興から北京に来たのは、民国六年(一九一七)の四月である。

#### 四

一九九〇年十一月一日、筆者が非常勤講師をしている徳島県立看護学校で、芥川龍之介の「蜜柑」と魯迅の「一件小事」(翻訳)とを、説明抜きで受講学生三十名に読んでもらった。そして六人ずつのグループごとに課題として類似点と相違点を検討してもらった。その結果をやや整理して紹介する。

#### 類似点

- 季節が冬
- 主人公は世の中に嫌気がさしている
- 小娘も老婆も貧しい姿
- どちらも些細な出来事

- 主人公は傍観者で最初は出来事に苛立っている
- 最後に主人公が感動している
- 相違点(上が芥川、下が魯迅)

- 日本
- 日暮れ
- 汽車
- 急いでいない
- 事故ではない
- 小娘と弟たち(肉親)
- 会話がな
- 蜜柑の色彩が鮮やか
- 現在
- 退屈な人生を僅かに忘れる
- 勇気と希望を増す

このような類似点と相違点が出てきたわけであるが、二つの作品に何らかの関係があるかどうか質問したところ、何か関係がありそうと答えたのは、約三分の一であった。残り約三分の二は、芥川龍之介と魯迅との間に関係があるはずがなく、二つの作品の間における類似性や対照性は、偶然の所産に過ぎないと思ったようである。確かに二つの作品を見比べるだけでは、関係があるかどうか結論を下すわけにはいかないが、受講学生たちが挙げなかった、そして見逃せない相違点として、作品の構成がある。魯迅の「一件小事」は、前書きにあたる部分と後書きにあたる部分とがあり、その間に出来事の部分がある。そして文末には「一九二〇年七月」とある。この構成を時間的に

表すと、現在（前書きにあたる部分）、過去（出来事の部分）、現在（後書きにあたる部分）となる。現在につながる過去の出来事を語っているわけだから、このような構成そのものは、ごく自然な感じを与える。しかし、考えて見れば、妙である。作者の言葉を信ずれば、いまでも忘れ得ぬ記憶として残っている、民国六年（一九一七）冬の出来事を、一九二〇年七月に執筆するというのは、時間が経過しているだけに、執筆を直接的に動機づける何かが介在しているのではないかと疑わせる余地がある。もっとも文末の「一九二〇年七月」は、正しくないらしい。人民文学出版社の『魯迅全集第一巻』所収の「一件小事」には注が二つ付されている。この二つの注も学習研究社版で訳されている。訳の方を引用する。

〔1〕本篇は、最初、一九一九年十二月一日、北京の『晨报 一周年記念増刊』に発表された。

〔2〕発表の年月および『魯迅日記』によれば、本篇の執筆時期は一九一九年十一月のはずである。

注〔2〕で『魯迅日記』に言及しているのは、具体性に欠けた記述で、よく分からないが、魯迅が十一月に晨報館に手紙を出していることを指しているのだろうか。ともかく「一件小事」の執筆時期は、文末の「一九二〇年七月」ではなく、一九一九年十一月であるらしい。とはいっても、民国六年（一九一七）の冬から二年という時間が経過している。執筆を直接的に動機づける何かが介在しているのではないかと疑わせる余地は、そのまま残る。そこに二つの作品を結び補助線を仮定しても、飛

躍とばかりはいえないであろう。

もし芥川龍之介の「蜜柑」を読んだことが刺激となって魯迅の「一件小事」の直接の執筆動機が形成されたのだとすれば、現在、過去の出来事、現在という、その回想形式の構成が執筆動機も含めて自然な成行きとして了解可能である。有り得る話であろうか。芥川龍之介の「密柑」は、大正八年（一九一九）五月一日発行の『新潮』第三十巻第五号に掲載された。数えて二十八歳である。その後、単行本にも収められているが、その最も早い『影燈籠』（春陽堂）でも大正九年（一九二〇）一月の刊であり、魯迅が「一件小事」を執筆したと推定される一九一九年十一月より後のことである。魯迅が読んだとすれば、『新潮』に掲載された初出時以外に考えられない。魯迅は、この時、数えて三十九歳。

## 五

魯迅が『新潮』を読んでいたかどうかなど、門外漢が調べようとすれば、迷路を歩くようなものである。蛇の道は蛇と、潔くヤメタと諦めた。ところが、豈図らんや、徳島市立図書館の一隅で手にした藤井省三氏の『魯迅——「故郷」の風景——』（平凡社）に魯迅と周作人兄弟が『新潮』を定期講読していたことが論拠とともに述べられているではないか。

一九一七年以後の「魯迅日記」によると、彼は東京の書店丸善と中西屋から毎月のように数冊の書籍を送らせている。いっぽう弟周作人の北京時代の日記は、現在一九二〇

年間しか公表されていないが、これを見るかぎり彼は『改造』『文章倶楽部』などの雑誌とともに、丸善を通して『新潮』をも定期購読している。魯迅・周作人兄弟はこれら文芸誌を通じて日本文壇の最新情勢に注目するかたわら、ヨーロッパ、とくにロシア文学の日本における紹介にも留意していたことと想像される。事実、魯迅は芥川、江口らの作品集を収めた新潮社『新進作家叢書』をまとめて五冊購入しており（一八年五月三十一日）、アルツイバーシエフ『労働者セキリオフ』（「幸福」「医者」などの短篇も収録）『チリコフ選集』などロシア文学の翻訳ものも、雑誌『新潮』などを通じてその刊行を知り入手していたものと推定されるのである。

（前掲書二三―二四頁）

藤井氏の考証は、チリコフの「田舎町」と魯迅の「故郷」とを比較対照するための基盤としてなされているのだが、たまたま芥川龍之介の「密柑」と魯迅の「一件小事」とを比較対照するための基盤にもなる。不労所得のようでも申し訳なく、本稿で返済できるかどうか分からないけれども、借用させていたたく。氏の推定に従えば、一九一九年に魯迅兄弟が雑誌『新潮』を定期購読していたことは、ほぼ間違いない。船便であったとすれば、一、二ヶ月遅れで手に入る。遅くとも三ヶ月はかからないであろう。大正八年（一九一九）五月一日発行の雑誌『新潮』第三十巻第五号に「私の出遇った事」の総題で「一、密柑」として掲載された、芥川龍之介の「密柑」が同年の十二月一日の『晨报 一周年記念増刊』に発表された、魯迅の「一件小事」

の隠れた執筆動機であった可能性は、事実関係の上からも、高いといえよう。そして、或は、魯迅は、「一件小事」が「密柑」と比較されることを暗に期待していたのかも知れない。総題の「私の出遇った事」と「一件小事」とは、そのニュアンスにおいて、ほとんど翻訳の差ほどの違いしかない。直接の執筆動機を魯迅自身が恐らくその題で明かしているのではあるまいか。魯迅の方がほぼ十歳年上なのである。芥川龍之介とは異なる運命を引き受けた人間として、作品が比較されることに対する自信はあったものと思われる。また魯迅の第一小説集『呐喊』が一九二三年八月に出版され、その時以来「一件小事」の執筆時期は一九二〇年七月と作品末尾に記されているのだが、発表時期は一九一九年十二月なのだから明かに誤りである。この誤りが魯迅の一年記憶違いであるとすれば、『魯迅全集』の注釈者は執筆時期を十一月と推定しているけれども、七月で正しい可能性もある。もしそうだとすれば、この作品の執筆時期は一九一九年七月となり、芥川龍之介の「密柑」との関連は更に色濃く想定されるのである。

近代という時代が対象化されつつある現在、二つの作品の重なる部分も重ならない部分も共に示唆に富んでいるように思われる。また、たとえ、魯迅の「一件小事」の直接の執筆動機が芥川龍之介の「密柑」に触発されたものでなかったとしても、この二つの作品を比較する試みは、二人の作家の個性と位相が照らし出されてくることが予想され、それだけでも十分に意味があるかと思われる。（なるせ・てつお 教養部助教授）